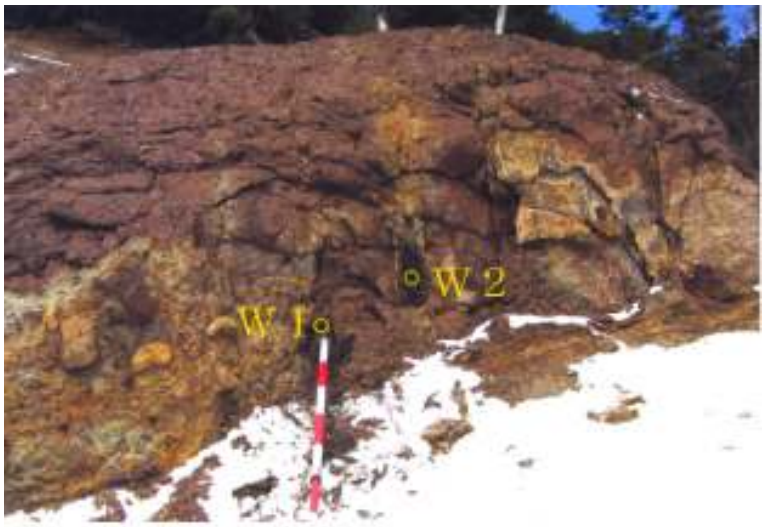
男体火山において一万年より若い噴火堆積物の発見.

［まとめ］男体火山（日光男体山）の最新の噴火活動は 14-15 ka cal BP とされており活火山リストからもれていたが、新たに火口内に発見した降下火砕物中に含まれる炭化木片の ^{14}C 年代測定の結果､最新の噴火活動は約 7ka cal BP であることが明らかとなった｡これは、活火山の認定基準を満たす噴火堆積物の発見である。

［本文］栃木県日光市に位置する中型の成層火山である男体火山（日光男体山）は、従来、最後の噴火活動が約 12 ka BP (暦年較正年代値で約 14～15 ka cal BP)とされ、活火山とは認定されていなかった。最近、信州大学理学部の研究グループによりこの 14～15 ka cal BP の噴火堆積物の上位に火砕流堆積物が発見されたため（三宅ほか，2006：火山学会予稿)、最新の噴火時期については再調査の必要があった。

富山大学理学部と産業技術総合研究所は、男体火山の火山地質調査を行い、山頂火口内に下位から水中火山岩、湖成堆積物、それらを覆う降下火砕堆積物を発見した。それぞれに含まれる炭化木片の放射性炭素年代測定（^{14}C 年代測定）を行ったところ、水中火山岩の直上で湖成層の最下位に含まれるものが約 8 千年前（7352±112yr BP，暦年較正値：8380～7970 cal BP)、降下火砕物に含まれるものが約 7 千年前（W1：6108±108yr BP，暦年較正値：7300～6700 cal yr BP および W2：6090±112yr BP，暦年較正値：7250～6650 cal yr BP）の年代値が得られた。このことにより、男体火山の確認された最後の噴火は、従来の見解よりも 8 千～7 千年も若いことが判明し、活火山の認定基準を満たすことが明らかとなった。この成果は、2008 年 9 月に行われた地質学会秋田大会にてポスター発表した。また、すでに地質学会からプレス発表が行なわれ、新聞などで報道された。



年代測定を行なった炭化材（W1，W2）
赤褐～褐色したものが降下火砕堆積物．その中に立木の状態で炭化した木が含まれており，それを^{14}C年代測定した．